

センター通信

第255号

2008年2月25日発行

名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニール新栄301号
郵便振替 00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]
<http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/>



Zamenhofa Festo 2007 de NEC.

目次

ザメンホフ祭 07	猪飼吉計	2
BEKKURSOについて	伊藤俊彦	3
ザメンホフ祭で朗読の試み	山田 義	4
ADIAŬANTE JAPANION	M.J. De Menezes	6
「二木紘三のうた物語」について	伊藤俊彦	7
名古屋エスペラントセンターと東海エスペラント連盟の協働を	黒柳吉隆	8
Nekrologo		9
編集後記	編集者	12

ザメンホフ祭 07は

12月8日午後、名古屋エスペラントセンター主催により東桜会館（名古屋市東区）において開催された。メインのプログラムは、森田明講演「モスクワでのロシア文部アカデミーでのこと」。当初の希望だった2009年にかえて2010年に世界大会を招致する気運が高まるロシアでの運動について報告があった。森田氏は大学退職を控え、本格的な運動復帰が期待されている。

図書紹介として猪飼吉計が“Historio por Malfermi Estontecon”を、伊藤俊彦が D.E.Keefe 著の語法問題集“Bekkurso”を選んだ。これは従来のエスペラント教本にはないタイプの本である。

休憩をはさんで山田義が犬山での日本大会の記念品“Gon-vulpo kaj aliaj rakontoj”から、Por aĉeti gantojnを紙芝居付きで朗読し、歌唱以外にも才能を示した。

そのあと、センターが出版してきたザメンホフもののなかから、永瀬義勝は“unuaj libroj por esperantistoj”を、猪飼は“Zamenhofaj paroladoj 1, 2, 3”を、森田は“Zamenhofa Ekzemplaro”をとりあげ、直接たずさわった者の立場から独自の見解を述べ、ザメンホフ没後90年へのささやかなオマージュとした。

最後に Mario Jose de Menezes さんが4年間にわたる日本のエス界での付き合いに謝意を述べ、締めくくりとした。

名古屋エスペラントセンターの
ザメンホフ祭

田

ザメンホフ祭：12月8日(土)午後1時半受付、2時開始
東桜会館（地下鉄東桜駅、自由軒から徒歩9分・名古屋市東区東桜2-4-35、電話052-973-2223）
会費：一般1,000円 学生・外国籍者300円

懇親会：5時半ごろより、地下鉄新栄町駅から徒歩3分
「えび寿」新栄店（中沢新栄2-1-18 電話052-342-7569）
会費：一般4,000円 学生・外国籍者2,000円

ザメンホフ祭のメインのプログラムとして、センターの会員でもあり名古屋市立大学教授である、森田明氏をお願いします。氏は、4月にモスクワで開かれた、ロシア文部アカデミー主催の会議「外国語教育におけるエスペラントの予備教育的役割」に出席されましたので、その模様を語っていただきます。

第二のプログラムは、今年がザメンホフ没後90年目にあたるのを記念した内容です。センターは、ザメンホフ関連の基礎文庫を次々に世に問うてきました。そのなかから3タイトルを厳選して、それぞれの出版に関わった人たちに、その出版の意義を語っていただきます。

プログラムの最後には、センター会員山田義氏が、2004年の犬山の日本大会の記念品の、“Gon-vulpo kaj aliaj rakontoj”から、朗読する予定です。

名古屋エスペラントセンター 461-0004 名古屋市東区東一丁目26-10 ユニプル新栄 301号



参加22名。静岡からは杉山茂喜さんが、外国籍ではほかに豊橋在住の Nguyen Thi Thanh Nga と Duc さん妻夫が見えていた。終了後、12名が居酒屋えび寿で懇親会を持った。(猪飼吉計) ★

“B E K K U R S O”について

伊藤 俊彦

本書は、今年〔2007年〕刊行されたばかりの本で、おもに接頭辞と接尾辞の学習のために編集されたドリル、問題集です。短い問題文が2,100題も掲載されていて、空欄にあてはまる単語を、列挙されているもののなかから選んで記入するという体裁になっています（解答は巻末についています）。ちょうど中学校の英語のドリルといった趣で、中学校を卒業してから久しい方でも楽しく学習ができて、数独じゃないけれど格好の頭の体操にもなるでしょう。CDもついています。

編者のデニス・エドワード・キーフは、1951年、アメリカ生まれで、現在はフランス在住のエスペランチストです。10月27日（土）に藤本達生氏に伴われ、拙宅に來訪し、2泊しました（藤本さんは深夜まで談論風発して、翌朝早く帰られました）。彼はヨーロッパ各地の大学でマーケティング論などを講じていましたが、現在は失業中の身。中国でエスペラントを教え、横浜の世界大会に参加し、亀岡でも2ヶ月滞在して教え、東京を経て帰国の目前でした。

フランスでは、ブルゴーニュの築200年以上の石造りの家に、今はひとり暮らしとのこと。自宅から2キロメートルほど離れたところに、ロマネスク建築として有名な、あのフォントネー修道院があるそうです。

エスペラントについては、グレジヨンとかサンフランシスコ州立大学の夏季セミナーなどで教えた経験を持ち、ホームページ（BEKkurso, Lingvo Festivalo）などでも活躍しているそうですが、私は寡聞にして会ってから初めてそのことを知りました。

本書とは直接関係ありませんが、彼が拙宅に滞在していたときのエピソードをひとつ。日曜日に岩倉市内を散策したあと、明治村に彼を案内しました。そこを選んだのは、ただ拙宅から一番近い観光地だからというだけで、他に格別の理由があったわけではありません。

駐車場に車を停め、北門から入園すると、眼前に東京から移築された旧帝国ホテルの正面玄関が建っています。それが視野に入ったとたん、彼の表情に驚きが走りました。周知のとおり、これはアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが設計したもので、1922年に竣工しています。デニスの説明によると、ライトの自宅がイリノイ州にあるが、そこにはデニスの母の生家があるので、彼はライトには早くから親しみを覚えていたとのこと。そればかりか、ライトについて何冊かの本を読んでいて、彼が日本でホテルの建築をしたことも知っていました。しかし、まさかそのホテルに、偶然訪れたこの地の山中で遭遇するとは全く思いもよらぬことだったようです。

いかにもライト風の水平線を強調した帝国ホテルの外観、内装をカメラに収めながら、彼は思わぬ出会いに感慨深げでした。アメリカ人にとってライトは特別な意味をもつ建築

家なのかもしれません。まこと、世界は広いようで狭い。そして、偶然にもデニスにライトの作品を引き合わせることができて、こちらもいささかの感慨を覚えた次第です。

本書に話を戻します。開巻冒頭の問題文ですが、

Ĉinio estas granda, sed Japanio estas m .
とあって、下線部に適当な語を書き入れよ、というのです。答えは無論、malgranda に相違ありません。それは確かに面積、人口という観点から見れば、まさにそのとおりだし、デニスにも別に他意はないのでしょう。しかし、「中国は大国であるが、日本は小国である。」という文章に、停滞する日本、対照的に経済発展著しい中国を思い、ついナショナルな心情を掻き立てられます。まあ、その両方に滞在したことのあるアメリカ人から見れば、両国はまさにこのとおりに見えるのでしょうね。ちなみに本書は中国で印刷出版されました。

このように本書は、シンプルな問題を解きながら、現代の社会情勢に思いをはせ、さらにアフォリズム集と見て楽しむこともできる重宝な本でもあるのです。ぜひご購入されん



ザメンホフ祭で朗読の試み

山田義

今年のザメンホフ祭で私はエスペラントで童話を朗読して聞いてもらった。15分余の朗読は聞く人には長過ぎて退屈したのではないかと心配している。しかし、私にとっては挑戦だった。新美南吉の「手袋を買いに」という童話を筒井和幸さんがエスペラント訳したものだ。犬山での日本大会の記念本として名古屋エスペラントセンターが発行した“Gon-Vulpo kaj aliaj rakontoj”という本に“Por aĉeti gantojn”が収まっている。新美南吉は私の郷里、半田出身の童話作家だ。

ザメンホフ祭までに何回となく練習したが終わってみるとまだまだ足りなかったと思われる。エスペラント文の細かいところまで意味をしっかりと分かっていないと人前で読めない。多くの人はこの物語をよく知っているはずだが、朗読をエスペラントで聞く人に内容を分かって聞いてもらいたいと考えた。朗読の補助として偕成社発行の『手ぶくろを買いに』にある黒井健の挿絵を大きな判に延ばして準備したものを、紙芝居のようにめくってもらった。

字が書いてある通りに発音を正しくはっきりと、だけでは朗読にならない。人がそれを聞いて文字に書き起こすことを目的に読むのなら丁寧にゆっくり棒読みでいいだろう。それならコンピュータでもやる。今回やってみて出た結論は、しっかり練習して演技を磨き芸術として仕上げようと思うとき、とんでもない難しさを感じた。この童話に出てくる登場人物は、vulpido, vulpo-patrinoだけではなく、一言だけだが男声のĉapelistoや、家の中か

ら女声 homa patrino と幼児の声で homa etulo が登場する。

主人公 vulpido の声色を目立つように工夫した。その他の声は音程を地の声と差をつけた。地の声はなるべく低く抑え落ち着いた雰囲気を出すつもりだったが、あとで録音を聞いてみると力が入って高めになっていた。Vulpido の声色はずいぶん練習したのだから喉と発声の具合が一定しない。さっきの場面と今度とで同一登場人物として同じ声色が出なくなってしまった。

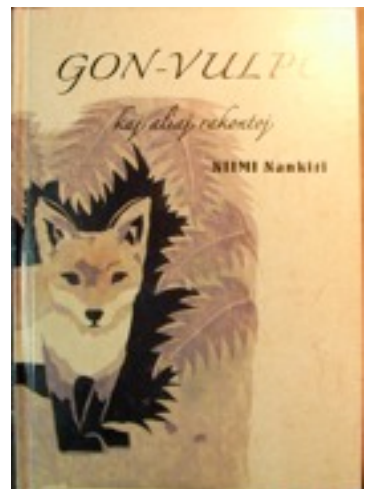
30歳ころ、腹話術師の春風イチロー師匠から腹話術の人形の声の出し方を教わったことがある。その後自分で、口と目の動く人形を作り教会の日曜学校で子どもたちに見せている。今回朗読したvulpidoの声色にはこの人形の発声を使わなかったが、人の前で普段使っていない発声をするに抵抗があった、それには勇気と自信が必要だ。エスペラントで歌うときにも考えるのだが、人前で歌ったり読み聞かせるとき、何回も声を出して歌ったり読んだりする必要がある中で珍しい単語をなんども声に出す、発音だけでなく言い回しにも口を慣らせることとなる。物語全体を読んでその情景を思い浮かべ物語の進展の段階を区切っていく、短い文章の中のリズムとイントネーションを組み立て積み重ねて行く。熱の入るところは声を荒げるのがいいとはかぎらない。特に、アクセントとリズムは日本語とは違いエスペラントではうまく表現すると効果が出る、人物の表現は口先だけではなく顔全体で作っていかないと人物の声に近づかない。

コンピュータなら耳で聞いてエスペラントの綴りが一文字ずつ読めてくるだろう。でも機械ではなく人が人に童話という芸術作品を読み聞かせるのだ。録音したものを波形編集ソフトである程度は間を削除したり差込んだりできるし、読みの部分と会話の部分に分けて録音しておいてつなぎ合わせることも可能だ。でも、ザメンホフ祭では15分という持ち時間でマイクの前に椅子に座って読む朗読の実演だ。とちったり喉を鳴らしたりするのも演技のうちに入ってしまう。1文字とか1単語を明瞭に読み上げるのではない、コメントが聞いて書き取れるようにとただ丁寧に読むのではなく、物語の情景を伝えるために数個の単語を一気に読んでしまう必要もあった。

読みはじめたとき、聴衆席からテーブルの上で鉛筆かボールペンを走らせているのが聞こえて来た。まもなく聞く人たちが静まって聞いてくれた、15分の長さを聴衆は耐えてくれるだろうか心配していたので、少しでも短くしようといくつかは作作的に省いたが、今思うとその必要はなかったようだ。

準備したものを人前で演技発表することは実に楽しいものだ。来年のザメンホフ祭にはもっと多くの人がそれぞれその醍醐味を味わってもらえるプログラムづくりをする必要があるだろう。

家で録音室を整えてもう一度読んで録音してみようと思っているが今度は全文を読むことにする。★



ADIAŬANTE JAPANION

M.J. De Menezes

Post la Zamenhofa Festo kiun NEC okazigis en la 8-a de decembro 2007, kelkaj el la partoprenantoj amike renkontiĝis en japana restoracio, proksime al la subtertrajnstacio Ŝinsakae Maĉi. Tie, dum la kutima babilado, Ikai petis al mi ion skribi pri mia sperto vivi en Japanio.



Por mi ne estas facile skribi pri tiu afero, ĉar impresoj estas personaj, kaj ju pli oni klopodas esti sincera des pli io kaŝe restas por esti dirata. Tamen mi klopodu skribi ĉi tie pri kelkaj neforgeseblaj okazaĵoj spertitaj de mi en Japanio, precipe en Nagojo.

Kiam mi alvenis Nagojon en 2004, mi estis amike akceptita de sinjoro Jamguĉi, kiu invitis min al NEC, por sin prezenti al kelkaj gesamideanoj. De tiam, mi ekpartoprenis en la nippona esperantio. Ikai donis al mi ŝancon koni la monumenton kaj muzeon omaĝajn al

Sugihara, ĝui semajnfinojn en Esperanto-Domo de Yatugatake, koni la muzeon omaĝan al Niimi Nankiĉi, kaj aliajn ŝancojn. Nagase vizitis min miahejme kaj gvidis min al belaj vidindaĵoj en Nagojo. Kurojanagi invitis min partopreni en liaj instruklasoj de Esperanto. Sinjorino Mucuko invitis min partopreni en kelkaj taskoj esperantaj. Kawai invitis min prelegi dum la Somera Seminario de Aiĉi. Esperantistoj de aliaj regionoj invitis min partopreni en renkontiĝoj... Bone, tiuj ĉi estas neforgeseblaj spertoj, kiujn nur Japanio, tio estas, japanoj esperantistaj, al mi ebligis.

Dum mia laborperiodo eksterlande, ĉie kien mi iras, mi emas semi kelkajn esperantsemojn. Tio okazis en Kolombio, en Nikaragvo kaj ankaŭ en Japanio: mi havis ŝancon instrui Esperanton al tri homoj kiuj loĝas tie ĉi.

Mia estro en la Brazila Ministerio de Eksteraj Rilatoj sendas min al Germanio, al la Ĝenerala Konsulejo en Frankfurto. Tie mi ankaŭ esperas partopreni en la movado esperanta.

Mi profitas la ŝancon por danki al vi, karaj geamikoj de Nagoja Esperanto-Centro, al la komplezo akcepti min ĉe vi, kie mi havis memorendajn spertojn. Sciu, ankaŭ, ke mia domo en Frankfurto estas al via dispono, ĉiufoje kiam vi iros al Eŭropo. ★

「二木紘三のうた物語」について

伊藤俊彦

「二木紘三のうた物語」というサイトがあります。数百の曲の歌詞とメロディーをMIDIで紹介するとともに、「蛇足」と題して、それぞれの歌にまつわる物語や思い出などが掲載されており、なかなか含蓄と含羞があります。曲目は歌謡曲やフォークから外国民謡、童謡・唱歌などに及び、前身の「MIDI歌声喫茶」からのアクセスの累計は1000万を超えています。

管理人の二木紘三氏は1942年生まれ of 文筆家ですから、私などよりも一回り年長ですが、それでも、ここで掲載されている歌には、私たちにとっても同時代の歌として懐かし、胸にしみるものが数多くあります。例えば、「高校三年生」「青春時代」「霧の中の少女」「旅人よ」等々、あげていけばキリがありません。

「モスクワ郊外の夕べ」なんていうのもいいですね。3番の「やさしき君のうなじ まつげがふるえる　うち明けることばなく　この道この胸」などという歌詞に、青春時台の甘酸っぱい感傷を抱く人は多いでしょう。もとより、「肩ほそき少女を年増の小太りとなしつつ歳月なほとどまらず」（『島田修三歌集　シジフォスの朝』）というのが現実であってみれば、青春はこれらの曲と思い出の中にのみ存在しているというべきかもしれません。

ところで、この曲の「蛇足」には、「畏友・森田明君がこの歌のエスペラント訳を教えてくださいましたので、掲載します。」として、エスペラントの歌詞が掲載されています。ご存知の方もおありでしょうが、実は二木氏は（もと？）エスペランチストで、『国際語の歴史と思想』（毎日新聞社）、『国際共通語の夢』（筑摩書房）の著作があります。前者が刊行されたときに、名古屋の東海大会で講演していただいたこともあります。

ガロが歌った、あの「学生街の喫茶店」も収録されています。この曲の「蛇足」で、二木氏は、この歌のモデルになった喫茶店は、お茶の水駅近くにあった「丘」だとして、それにまつわる思い出を語っています。当時は、日本エスペラント学会が本郷にあり、そこで会合を開いた学生エスペランチストたちは、もっとおしゃべりしたくて、「Je la 8-a, ĉe la Oka」（「8時に丘で」）を合い言葉に、「丘」で落ち合って話し続けたのだそうです。オーカが韻を踏んでいるのが気に入って使っていたのだとか。ちなみに氏は早稲田大学卒業です。

名古屋在住の磯部晶策氏がエスペラント訳されたボスニア民謡の“Ekirinte al Bembaša”も収録されています。この曲も学生時代の合宿などでよく歌いましたね。

探せばまだ他にもエスペラントへの言及はあるのかもしれませんが、とりあえず気がついたものをいくつか紹介させていただきました。一度アクセスされんことを。

<http://duarbo.air-nifty.com/songs/>

センター会員の皆様へ
この地方の活性化のために

名古屋エスペラントセンターと 東海エスペラント連盟の協働を

☆ 東海エスペラント連盟は、昨年の東海大会の際の総会において規約を全面改定し、広く参加しやすい連盟に改組しました。従来の規約からの大きな変更点は、会員の資格を当地方に活動の拠点を置く団体、個人で連盟の規約を尊重する者なら、誰でも会員になれるようにしたこと、「活動」の範囲も広く解釈し、学習会の集まりも団体として加わることができるようにしたことです。（その団体は「3名以上」の集まりで案内などの連絡が取れる方を届けていただければよく、団体の規約などを必要とするわけではありません。）その結果、豊田エス会と犬山エス会が新たに参加し、既存の会については、名前だけで実体のない会は整理し、団体加盟要件の「3名以上」を満たさない会は個人会員に切り替え、実質的に活動できる連盟になりました。

実際の主な活動は、現状では毎年開催する「東海大会」の常置準備会の役割（大会を引き受ける団体があればそこに委託し、なければ自ら準備）を果たすことですが、将来は各会・グループ単位では、開催が難しいエスペラント中級セミナーの開催、一般市民向けの入門講習会・展示会などの開催の援助を行い、地方会を育て、東海地方のどの自治体にもエス会が存在するという状況に発展していければという夢を持っています。

2008年の役員：（会長）黒柳吉隆，（副会長）杉山茂喜，（会計）後藤好美，（会計監査）磯部 晃

☆ 「名古屋エスペラントセンターは地方会とは違う活動をする」ということで、それを支援する意味で、私は、10年以上会員を続けていますが、その「違う活動」とは出版、蔵書（資料保存）、名古屋での活動拠点の確保（事務所の維持と部屋貸し）と思われます。しかし、他のエス会と同様に会員が増えない悩みを持っています。3年前からは運営委員として講習会の講師を務めて、受講生の大部分（9名）に会員になってもらいました。この経験から、センターは上記の活動に加えて、講師、スタッフの派遣などにより地方会を積極的に育てることも大きな役割と感じています。そして、その地方会の会員にセンターの会員にもなってもらおうのがお互いのために一番よい関係と思います。

☆ センター委員会では、「連盟の活動状況を見て、加盟するかどうかを次の総会で決める」と結論しています。東海連盟は今年の東海大会の準備に入ってはいますが、改組して半年余りの活動では見るべき成果はありません。しかし、見ているだけでは活動になりません。UK（横浜）を日本のエスペランチストの協働で成功に導いた力を東海地方でも活かしていきませんか。会員の皆さんが次の総会（3月に行われる予定）で、十分にご審議いただいて加盟の意思表示をされるのをお待ちしております。

☆ 繰り返しになりますが、東海連盟は、センターの活動と矛盾も競合もしないし、制約もしない。むしろ協働するメリットが大きく、会費も年間1000円は決して財政を圧迫することにはならない金額です。連盟とセンターが協働することによって、東海地方のエスペラント活動を活性化し、センターの会員が増加すれば、利用率が低い事務所の利用も、書籍の販売も拡大し、経営基盤も安定するという1石3鳥の効果があると思われる。センターが会員数も活動内容も東海地方の中心的なエスペラント団体として、積極的に加盟することに躊躇する理由は無いように思います。

もし、ご都合で総会に出席できない場合には、加盟に賛成する人に委任してくださるよう東海エスペラント連盟会長としてお願いします。

名古屋エスペラントセンター委員 黒柳吉隆

Nekrologo 追悼

高杉一郎さんがこの1月9日、99歳で亡くなりました。高杉さんはエロシェンコ全集を訳したことで有名です。高杉さんは長らく静岡大学教授を務められ、東海地方の運動との関わりも深いと思われますが、ここではとりあえず3点ほどをご紹介します。

・三重県立美術館で高杉一郎さんが講演

「エロシェンコ氏の像」をめぐる講演会が1984年10月28日（日）三重県立美術館講堂で行われました。主催は三重県立美術館、美術館友の会、三重エスペラント会。

三重県立美術館で中村彝展が開催（1984年10月13日～11月25日）中のこの日に、同美術館長の陰里鉄郎氏が「中村彝の芸術について」と題して講演し、次いで、高杉一郎氏が「作品『エロシェンコ氏の像』をめぐる」と題して講演しました。

名古屋からも多数のエスペランチストが参加し、講演終了後、津駅前ホテルのレストランで高杉夫妻を囲む夕食会を行いました。

Revuo Orienta には事前に講演会の開催に関する記事が掲載されたようです。La Movado にも掲載されたと思いますが、未確認です。なお、センター通信101号（1984年発行）に、講演会に関する三重エスペラント会からの案内が掲載されています。

・名古屋エスペラントセンターに関する高杉氏の言及

氏は、雑誌“Tempo”（1934-1940）の存在を、その刊行当時は知らなかったそうです。「こんど、これを読むことができたのは、名古屋エスペラント・センター出版会が1982年6月になって、全1巻本の“Tempo”復刻版を出版したおかげである。」と述べておられます。（『ひとすじのみどりの小径』p105 リバーロイ社、1997年）

・書評等

伊藤俊彦が高杉氏の著書について、次のような書評を書いています。

- ・『ザメンホフの家族たち』… La Movado 370号（1981年12月号）

- ・『スターリン体験』… La Movado 489号 (1991年11月号)
- ・『往きて還りし兵の記憶』… 名古屋エスペラントセンターのホームページ「読書日記」



朝日新聞2月6日夕刊

名古屋エスペラントセンターが1989年に発行したZAMENHOFA EKZEMPLARO（エスペラントの語法と表現の辞典）の著者である野村理兵衛氏（富山県南砺市）は、本年1月13日、老衰のためお亡くなりになりました。享年100歳。通夜は14日、葬儀は15日に行われました。なお、センターからご遺族あてに弔電をお送りしました。

野村氏は、同辞典の刊行により小坂賞、OSIEK賞を受賞されました。小坂賞は、1990年8月に横浜市で行われた第77回日本エスペラント大会で同氏に授与されました。OSIEK賞に関しては、同年11月17日に、名古屋エスペラントセンターのメンバーが富山県城端町（現在は南砺市の一部）に野村理兵衛氏を訪ね、伝達式、祝賀会を行いました。

同年12月16日に愛知県青年会館で名古屋エスペラントセンター主催のザメンホフ祭が行われた際、この伝達式の模様を伊藤、永瀬が報告しました。ザメンホフ祭のプログラムには、伊藤による報告が掲載されました。その報告が、センター通信149号（1991年1月21日発行）に転載されていますので、記録として改めて掲載します。

同辞典の刊行に深く関わった森田明さんによる詳細な回想、記録がいずれ発表されることを期待します。

末筆ながら、野村理兵衛氏のご冥福をお祈りいたします。

1990年ザメンホフ祭のしおりから

OSIEK賞伝達式

伊藤俊彦

まず、野村邸を訪問し、打ち合わせ。その後、会場である公民館を訪れました。門を入ると、伝達式の大きな立て看板が掲げられているのに驚き、さらに会場の中へ入って、これまた大きな横幕が張られているのにまた驚きました。今回の伝達式に寄せる町当局の熱意を感じました。

会場の設営も終り、定刻をやや過ぎた午後5時10分、伊藤の司会により開会。まず、名古屋エスペラントセンター出版会会長の永瀬があいさつしました。

次いで、OSIEK賞の伝達式に移りました。まず、永瀬が、この辞典の実質的な共同の編者というべき立場にあり、今回都合で出席できなかった森田明氏からの長い、力のこもったメッセージを代読しました。その後、町の行事があったにもかかわらず、ご出席いただいた川田哲三町長から賞状を伝達していただきました。

来賓祝辞として、同町長、荒井登志雄教育長、長井立男図書館長の三氏からそれぞれご祝辞をいただきました。その後、今回の受賞を記念して、当出版会の出版物である“tempo”を町に寄贈することになり、永瀬が町長に手渡しました。次いで、地元のエスペラント会を代表して福井工業大学教授の宮本一郎氏からも祝辞をいただきました。次いで、JEI, KLEG, KEAから寄せられた祝電、メッセージを、鈴木がエスペラント文を読み、永瀬が通訳して披露しました。

野村理兵衛氏があいさつに立ち、とうてい口ではいいあらわせぬほどの感激であると謝辞を述べられました。記念品として出版会から同氏にザメンホフ訳の旧約聖書を贈呈することになり、永瀬が手渡しました。最後に、多年にわたり内助の功を尽くされてこられたあや夫人に鈴木から花束を贈呈しました。

引き続き、同じメンバーで近くの料亭金島に移り、祝賀パーティを行いました。ここでは、富山エスペラント会から記念品が贈呈されました。また、野村氏を囲んで、話に花が咲きました。町長も若い頃、野村氏の主催するエスペラントの講習会に参加したことなどが話題になりました。8時30分過ぎ盛会のうちに解散しました。（ザメンホフ祭のしおりより転載）

クロード・ピロンClaude Piron さん（写真）が、1月23日亡くなりました。ピロンさんの著書“Esperanto:ĉu eŭropo aŭ azia lingvo?”(1977)の邦訳（写真右）を名古屋エスペラントセンターは1981年に刊行しています。訳者は水野義明明治大学教授（当時）でした。



お知らせ

名古屋エスペラントセンター2008年度総会の日程が決まりました。3月22日(土)午後2時より。NECの部屋で。

①東海連盟への加入の是非、

②センター通信のメール配信等の是非、その他が議題になります。

維持員には総会の案内と出欠ハガキが届きます。各委員は年間報告と活動計画を用意してください。

2月25日(月)11:30-13:30 阪直さんを囲む会は三重県津市・近鉄津駅隣接のアスト2階のみやびで昼食会です、会費3,000円。問い合わせは：山本修<zelkovo@m5.cty-net.ne.jp>へ

5月31日-6月1日東海エスペラント大会（犬山国際ユースホテル）

"NAGOJA ESPERANTO-CENTRO"の案内

名古屋エスペラントセンターは 略称NEC（ノー・エー・ツォー）といいます。維持費をおさめる維持員は約60名となっています。

維持員A：毎月 500円（年間6,000円）

維持員B：毎月1,000円（年間12,000円）

維持員C：毎月2,000円（年間24,000円）

維持員D：毎月3,000円（年間36,000円）

各ランクの間に義務・権利の違いはありません。

郵便振替：00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]

Estas la kvar membro-kategorioj.

A-membro: 500 enoj monate

B-membro: 1000 enoj monate

C-membro: 2000 enoj monate

D-membro: 3000 enoj monate

Tamen ne ekzistas diferenco de rajto/devo inter la membro-kategorioj. Tio signifas, ke ni akceptas pagon laŭ via ekonomia stato.

名古屋市東区葵一丁目26-10 ユニール新栄301号が活動の所在地です。エスペラントに関する図書の発行と販売、雑誌などを含む蔵書の管理、エスペラントの学習や講習、外国のエスペランティストの歓迎会やエスペラントの講演などを含んだ企画などを行っています。機関誌「センター通信」は年に4回ほどの発行しています。維持員は部屋を「使用規則」によって使用することができます。30名収容できます。

編集後記 わたしの今度のMacコンピュータは内蔵カメラ付きです。Skypeを設定して相手の顔を見ながら空白のあるエスペラント会話が楽しめます。両手が自由であり、電話のように声だけの会話に捕われないのです。人は実際、顔の表情や手の動きに助けられて会話をしているんだと思わされます。無言の時があってもそれも人生のひとつ。・山田 義